

パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第3号）

（第46回世界遺産委員会への参加）

2024年8月20日

ユネスコ日本大使の加納です。

前回のお手紙からだいぶ時間が経ってしまいました。

パリは先日までオリンピックで大いに盛り上がっていました。皆さんも日本選手団の活躍ぶりに声援を送っておられたのではないのでしょうか。

私は、7月21日から30日まで、インドのニューデリーで開催された世界遺産委員会に参加していたので、パリ五輪の開会式と前半はインドのニュースで見えていました。パリに戻った後、パリ日本文化会館に設置されたジャパン・ハウスを訪れ、TEAM Japan の活躍ぶりを目の当たりにすることができました。



パリ日本文化会館に設置されたジャパン・ハウス

今回は、ユネスコの任務の中でも最もよく知られている、世界遺産についてお伝えします。

1. 世界遺産について

まず、世界遺産の仕組みについてご紹介します。

世界遺産条約（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）は、「顕著な普遍的価値（Outstanding Universal Value）」を有する文化遺産や自然遺産を国際社会が共同して保護するため、１９７２年の第１７回ユネスコ総会で採択された条約です（１９７５年発効）。日本は１９９２年に加入しており、これまで文化遺産２０件、自然遺産５件が登録されています。

同条約に基づき、２１カ国の委員国で構成される世界遺産委員会が設置されています。世界遺産委員会は、ユネスコ事務局内に設置された世界遺産センターの支援を受けつつ、また諮問機関の助言を得ながら、世界遺産の新規登録のほか、登録済み案件の保全状況審査も行います。２１カ国の委員国は締約国による選挙で選ばれており、日本は２０２１年から２０２５年まで委員国を務めています。諮問機関には国際記念物遺跡会議（ICOMOS イコモス）、国際自然保護連合（IUCN）、文化財の保存及び修復のための国際センター（ICCROM）の３つがありますが、最もよく知られているのは、各国が世界文化遺産への登録を推薦した案件の調査や勧告を行うイコモスです。

今年の世界遺産委員会は第４６回目となり、議長はインドのシャルマ・ユネスコ代表部大使が務めました。インドでは初めての開催ということで、会場にはインドの世界遺産関連の資料や各地の物産が展示され、初日の開会式にはモディ首相が参加してスピーチを行うなど、ホスト国としての強い意気込みが感じられました。



2. 「佐渡島の金山」の世界文化遺産登録

今回の世界遺産委員会で新規登録案件として審議されたのは、自然遺産、複合遺産、文化遺産合わせて26件ですが、そのうちの一つが日本が一昨年に推薦した「佐渡島の金山」です。江戸時代の17世紀初頭から19世紀半ば、世界の他地域で機械化が進む中で、手作業による独自の純度の高い金の生産体制を構築した点に「顕著な普遍的価値」があるとして登録を目指してきました。

6月7日にイコモスが公表した報告書では、4段階評価のうち「記載」に次ぐ「情報照会」が勧告されましたが、委員会開催までに一部地域の除外などイコモスの指摘事項は全てクリアしました。

「佐渡島の金山」は7月27日の午前セッションの冒頭に審議が始まりました。まず、シャルマ議長が本件を議論なしで審議することを提案。続いてユネスコ事務局とイコモスからの報告の後、ブルガリア代表が「情報照会」を「記載」に変更する修正決議案を提出しました。この時までに修正決議案には21委員国中15カ国が共同提案国に名を連ねることとなり、異論なく採択され、「佐渡島の金山」の登録が決定しました。この瞬間、会場に拍手が沸き起こり、代表団席にいた私も隣の花角英世新潟県知事や渡辺竜五佐渡市長らと握手を交わしました。その後、花角知事の感謝スピーチのほか、私から日本政府を代表してステートメントを読み上げました。続いて、韓国政府を代表して韓国のユネスコ代表部大使がステートメントを読み上げ、「佐渡島の金山」の審議が終わりました。これで、日本にとって26番目の世界遺産（文化遺産としては21番目）が誕生したことになります。

登録決定後は、議場内で多くの国々の代表団から祝福の挨拶を受けました。



「佐渡島の金山」の審議における日本政府代表によるステートメント（上）

審議終了後に各国代表団より祝福を受ける日本代表団（下）

今回、佐渡島の金山の世界遺産登録が実現したのは、この事業に取り組んでこられた全ての関係者の方々の尽力の賜物だと受けとめています。今回の登録を契機に、世界中の多くの方々が佐渡島の金山を訪れ、世界遺産としての価値が幅広く知られることを願っています。

3. 今回の世界遺産委員会

今回の世界遺産委員会では、佐渡島の金山の新規登録の他にも、いくつかの案件が審議されました。

現在も紛争が続く、中東ガザ地区においては、パレスチナより聖ヒラリオン教会の世界遺産の登録と危機遺産リストへの掲載が緊急案件として推薦されました。紛争継続地域であり、イコモスも「顕著な普遍的価値」を有するか判断を下すには十分な情報、時間的余裕がない状況です。一方で、イスラム教徒が住む紛争地域における歴史あるキリスト教教会の保護の意義というのも理解できるものでした。イコモスによる専門的観点からの調査を待ちつつ世界遺産として登録し、同時に危機遺産リストに掲載するとの決議案に全ての委員国が賛同しました。

南アフリカが推薦した、故ネルソン・マンデラ元大統領ゆかりの学校など複数の施設が、文化資産として登録されました。イコモスの勧告は、保全体制の問題などの理由により「情報照会」でしたが、南アフリカ側の働きかけにより「記載」とする修正決議案が出され、コンセンサスで登録が決定されました。アパルトヘイト撤廃、自由と和解のために闘ったマンデラ元大統領の足跡が今もなお強い訴求力を持っていることを実感しました。決定の後、祝福に訪れた南アフリカの代表団席で女性が涙を流して喜んでいたのが印象的でした。



世界遺産登録を喜ぶパレスチナ代表（左）と南アフリカ代表（右）

既存の世界遺産の保全状況審議では、ウクライナの資産関連の決議案においてロシアの侵略を名指しで批判する文言を巡って委員国間で応酬があり、コンセンサスの伝統が強い世界遺産委員会で今回唯一投票（秘密投票）に付されました。結果は僅差（2票差）でウクライナ支持の案が可決されましたが、改めてウクライナ情勢をめぐる西側諸国とグローバル・サウスの国々の温度差が浮

き彫りになった案件でした。

もう一つ興味深かったのは、英国のストーンヘンジ遺跡をめぐる議論です。私自身、1990年代初めにストーンヘンジを訪れたこともあり個人的にも関心を持っていたのですが、その頃から現地の道路建設計画を巡って世界遺産委員会で議論になっていたと初めて知りました。交通渋滞解消のため英国政府が進める道路建設が遺跡や景観に与える影響をイコモスが問題視し、同遺跡を危機遺産リストに入れるよう勧告を出したのに対し、英国側は経済性とのバランスを取るべきと反論。両者の溝はかなり深いように思われましたが、結局、今回の危機遺産リスト入りは見送られることとなりました。もっともその後の報道によれば、7月の総選挙を受けて発足した労働党内閣により、この道路建設計画は撤回されたようです。経済的観点と遺産保護のバランスをとることの難しさを考えさせられる案件でした。

このほかにも、ネパールにおけるブッダの生誕地ルンビニの遺跡も今回、危機遺産リスト入りがイコモスから勧告されましたが、もう少しネパール側に時間的余裕を与えて、様子を見ようということとなり、危機遺産リスト入りは見送られました。

世界遺産登録はゴールではなく、人類共通の財産と認められた資産をどのように保全するかという取り組みのスタートになります。その際、地域経済の活性化や保全にかかるコストなど、様々な観点を考慮しなくてはなりません。今回の世界遺産委員会での議論を聴きながら、改めてそう感じました。

4. 各国・国際機関関係者とのやりとり

マルチの会議への出席の意義は、会議そのものの参加に加え、各国から参加する様々な関係者と直接意見を交わし、交流を深めることです。参加者の一部は普段から顔を合わせているユネスコの同僚大使ですが、本国からの参加者とは、こうした会合が貴重な意見交換の機会となります。

今回の世界遺産委員会でも、コーヒブレイクやランチタイムの機会を利用して、各国関係者と意見を交わしました。



各国代表との懇談

いくつかの代表団からはその国の物産のお土産をいただきました。マルチの会合は各国にとっても自国の文化をアピールする重要な機会となるのです。議場でも大変カラフルな民族衣装で参加している専門家がありました。

会議場内では、委員会審議のほかに様々なサイドイベントも開催されます。世界遺産をめぐる様々な課題について理解を深める良い機会となります。

私が出席したのは、南アフリカに拠点を置き、アフリカ各国の世界遺産登録や保全を支援しているアフリカ世界遺産基金（Africa World Heritage Fund）が主催したサイドイベントです。アフリカの世界遺産の登録数は、他地域に比べると少なく、人材確保などの面での課題が指摘されています。日本もユネスコの信託基金を通じて世界遺産分野でアフリカ各国を支援しており、新規案件の登録や既存資産の危機遺産リストからの除外などで具体的成果をあげています。このサイドイベントでもアフリカの豊かな文化、自然をいかに世界遺産として登録、保全していくかについて活発な議論が行われました。



アフリカの世界遺産に関するサイドイベント

5. インドの世界遺産

今回の世界遺産委員会が開催されたインドには、有数の世界遺産があります。日曜日に会議が休みになったのを利用して訪れた、デリーにある三つの世界遺産を、最後にご紹介します。

クトゥブ・ミナール (Qutb Minar) は、インド初のイスラム王朝であるインド・マムルーク朝の開祖アイバクが13世紀初頭に建造したイスラム建築です。高さ約73メートルのミナレットは近くで見ると圧倒的な存在感でした。

フマユーン廟 (Humayun's Tomb) は、ムガル帝国第二代皇帝フマユーンの霊廟で、16世紀後半の第三代アクバル大帝の治世下で建造されたものです。広大な敷地と建築様式はペルシアの影響を受けたものと言われています。酷暑の中で歩き回るのは難儀でしたが、それだけの価値はあります。独特の形式の屋根は、タージ・マハルのモデルになったそうです。

レッドフォート (Red Fort) は、17世紀半ばにムガル帝国第五代皇帝シャール・ジャハーンが建造した居城です。赤砂岩が建材に使われているのが名前の由来です。敷地内が工事中で外から眺めただけですが、赤みを帯びた建築が印象的でした。



クトゥブ・ミナール（左）とレッドフォート（右）



フマユーン廟

インドは43の世界遺産を擁する世界遺産大国です。短い時間でしたが、その豊かな遺産に触れることができました。ホスト国の文化を学ぶことができるのも、世界遺産委員会の醍醐味と言えるでしょう。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大